

二〇〇八年度 文理共通 第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

いまここであらためて、歴史とは何か、という問いをたてることにする。大きすぎる問いなので、問いを限定しなくてはならない。中島敦が「文字禍」で登場人物に問わせたように、歴史とはあったことをいうのか、それとも書かれたことをいうのか、ともう一度問うてみよう。この問いに博士は、「書かれなかった事は、無かつた事じゃ」と断定的に答える。すると博士の頭上に、歴史を刻んだ粘土板の山が崩れおちてきて命を奪ってしまうのだった。あたかも、そう断定した博士の誤りをただすかのように。こういう物語を書いた中島敦自身の答は、宙づりのままである。

たしかに、書かれなくても、言い伝えられ、記憶されていることがある。書かれたとしても、サンイツし、無に帰してしまふことがある。たとえば私が生涯に生きたことの多くは、仮に私自身が「自分史」などを試みたとしても、書かれずに終わる。そんなものは歴史の中の微粒子のような一要素にすぎないが、それがナポレオンの一生ならば、もちろんそれは歴史の一要素であるどころか、歴史そのものということになる。ナポレオンについて書かれた無数の文書があり、これからもまだ推定され、確定され、新たに書かれる事柄があるだろう。だから「書かれなかった事は、無かつた事じゃ」と断定することはできない。もちろん「書かれた事は、有つた事じゃ」ということもできないのだ。

さしあたって歴史は、書かれたこと、書かれなかったこと、あったこと、ありえたこと、なかったことの間にまたがつており、画定することのできないあいまいな霧のような領域を果てしなく広げている、というしかない。歴史学が、そのようなあいまいな領域をどんなに排除しようとしても、歴史学^アの存在そのものが、この巨大な領域に支えられ、養われている。

この巨大な領域のわずかな情報を与えてきたのは、長い間、神話であり、詩であり、劇であり、無数の伝承、物語、フィク

ションであった。

歴史の問題が「記憶」の問題として思考される、という傾向が顕著になったのはそれほど昔のことではない。歴史とはただ遺跡や史料の集積と解説ではなく、それらを含めた記憶の行為であることに注意がむけられるようになった。史料とは、記憶されたことの記録であるから、記憶の記憶である。歴史とは個人と集団の記憶とその操作であり、記憶するという行為をみちびく主体性と主観性なしにはありえない。つまり出来事を記憶する人間の欲望、感情、身体、経験^bを^a「チョウエツ」してはありえないのだ。

歴史を、記憶の一形態とみなそうとしたのは、おそらく歴史の過大な求心力から離脱しようとする別の歴史的思考の要請であった。歴史は、ある国、ある社会の代表的な価値観によって中心化され、その国あるいは社会の成員の自己像（アイデンティティ）を構成するような役割をになってきたからである。歴史とは、そのような自己像をめぐる戦い、言葉とイメージの闘争の歴史でもあった。歴史における勝者がある以前に、歴史そのものが、他の無数の言葉とイメージの間であって、相対的に勝ちをおさめてきた言葉でありイメージなのだ。

あるいは情報技術における記憶装置（メモリー）の役割さえも、歴史を記憶としてとらえるために一役買ったかもしれない。熱力学的な差異としての物質の記憶、遺伝子という記憶、これらの記憶形態の延長上にある記憶として人間の歴史を見つめることも、やはり歴史をめぐる抗争の間に、別の微粒子を見出し、別の運動を発見する^c「キカイ」になりえたのだ。量的に歴史をはるかに上回る記憶のひろがりの中であって、歴史は局限され、一定の中心にむけて等質化された記憶の束にすぎない。歴史は人間だけのものだが、記憶^dの方は、人間の歴史をはるかに上回るひろがり^eと深さをもっている。

^e歴史という概念そのものに、何か強迫的な性質が含まれている。歴史は、さまざまな形で個人の生を決定してきた。個人から集団を貫通する記憶の集積として、いま現存する言語、制度、慣習、法、技術、経済、建築、設備、道具などのすべてを形成し、保存し、破壊し、改造し、再生し、新たに作りだしてきた数えきれない成果、そのような成果すべての集積として、歴史は私を決定する。私の身体、思考、私の感情、欲望さえも、歴史に決定されている。人間であること、この場所、

この瞬間に生まれ、存在すること、あるいは死ぬことが、ことごとく歴史の限定（シンクウ）をもつ人々はそれを神の決定とみなすことであろう）であり、歴史の効果、作用であるといえる。

にもかかわらず、そのようなすべての決定から、私は自由になろうとする。死ぬことは、歴史の決定であると同時に、自然の決定にしたがって歴史から解放されることである。いや死ぬ前にも、私は、いつでも歴史から自由であることができた。私の自由な選択や行動や抵抗がなければ、そのような自由の集積や混沌（こんたん）がなければ、そもそも歴史そのものが存在しえなかった。

たとえばいま、私はこの文章を書くことも書かないこともできる、という最小の自由をもっているではないか。生活苦を覚悟の上で、私は会社をやめることもやめないこともできるといような自由をもち、自由にもとづく選択をしうる。そのような自由は、実に乏しい自由であるともいえるし、見方によっては大きな自由であるともいえる。そのような大小の自由が、歴史の中には、歴史の強制力や決定力と何らムジュンすることなく含まれている。歴史を作ってきたのは、伶俐な選択であると同時に、多くの気まぐれな、盲目の選択や偶然でもあった。

歴史は偶然であるのか、必然であるのか、そういう問いを私はたてようとしているのではない。歴史に対して、私の自由はあるのかどうか、と問うているのだ。そう問うことにはたして意味があるのかどうか、さらに問うてみるのだ。けれども、決して私は歴史からの完全な自由を欲しているのではないし、歴史をまったく無にしたいと思っているのでもない。歴史とは、無数の他者の行為、力、声、思考、夢想の痕跡にほかならない。それらとともにあることの喜びであり、苦しみであり、重さなのである。

〔注〕 ○ 「文字稿」——中島敦（一九〇九—一九四二）の短編小説。

（宇野邦一『反歴史論』）

設問

(一) 「歴史学の存在そのものが、この巨大な領域に支えられ、養われている」(傍線部ア)とあるが、どういうことか、説明せよ。

解答欄…一三・六cm×二行

(二) 「歴史そのものが、他の無数の言葉とイメージの間にあつて、相対的に勝ちをおさめてきた言葉でありイメージなのだ」(傍線部イ)とあるが、どういうことか、説明せよ。

解答欄…一三・六cm×二行

(三) 「記憶の方は、人間の歴史をはるかに上回るひろがりと深さをもっている」(傍線部ウ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

解答欄…一三・六cm×二行

(四) 「歴史という概念そのものに、何か強迫的な性質が含まれている」(傍線部エ)とあるが、どういうことか、説明せよ。

解答欄…一三・六cm×二行

(五) 筆者は「それらとともにあることの喜びであり、苦しみであり、重さなのである」(傍線部オ)と歴史について述べているが、どういうことか、一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ。(句読点も一字として数える。なお採点においては、表記についても考慮する。)

(六) 傍線部 a、b、c、d、e のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a サンイツ b チョウエツ c キカイ d シンコウ e ムジュン

【解答・解説】

出典 宇野邦一『反歴史論』〈第3章 歴史のカタストロフ 1 歴史を引き裂く時間〉

(一) パターンⅡ＋Ⅴ 【具体一般化型】＋【指示語問題】

最大のポイントは「この巨大な領域」が指す内容Ⅱ「書かれたこと……ような領域」をいかにコンパクトにまとめるかということ。「支えられ」と「養われ」を比喩でない表現にきちんと言い換えることも必要である。さらになぜ傍線部のように言えるのか、その理由を補填したいところだが、解答スペースからは無理がある。

解答ポイント

① 「この巨大な領域」が指す内容Ⅱ「書かれたこと……ような領域」をまとめる。
② 「支えられ」の言い換え。③ 「養われ」の言い換え。

注意点

「養われ」の言い換えを忘れないこと。

解答例

歴史学は事実かどうか画定できないあいまいで膨大な領域を前提として成立し、発展しているということ。

(二) パターンⅡ 【具体一般化型】

「勝ちをおさめてきた」という具体的な表現をどう一般化して言い換えるかがポイント。まず「ある国、ある社会の代表的な価値観によって中心化され」との対応をおさえる。次に「勝ち」である以上、何と戦ったのか、その対象を解答に含める。

解答ポイント

① 「ある国、ある社会の代表的な価値観によって中心化され」との対応をおさえる。
② 戦った対象である他の「多くの記憶（言葉やイメージ）」について言及する。

解答例

歴史とは、国や社会において、多くの記憶のひろがりの中から代表的な価値観によって中心化され、自己像を構成する言説や表象であるということ。

(三) パターンⅧ【置換型】

形式は理由説明問題だが、実質は「ひろがり」と「深さ」が何を指しているのかを答えさせる問題。

解答ポイント

①人間の記憶の「ひろがり」と「深さ」のなさを説明する。②「ひろがり」と「深さ」の意味するものを答える。

注意点

解答例では本文のまま「遺伝子」を用いているが、「物質」との兼ね合いから「生命」と一般化しても今回はよいだろう。しかし、この段落においても記憶装置のことを述べているのだから、一般化せずに「遺伝子」の方が適切である。

解答例

歴史は局限され等質化された人間の記憶にすぎないが、記憶自体は物質や遺伝子などにも存在するから。

(四) パターンⅠ①【圧縮型】

この段落全体が傍線部の説明になっている。いかにうまく圧縮できるかが問われている。

解答ポイント

①歴史Ⅱ記憶の集積として言語・制度・慣習などのすべてを形成している。②個人と集団との関係。③歴史が個人の生を決定すること。

解答例

歴史は、記憶の集積として社会のすべてを形成し、その結果さまざまに形個人の生を決定するということ。

(五) パターンⅡⅤ【具体一般化型】+【指示語問題】

まず「それら」という指示語をおさえなければならぬ。直前の「無数の他者の行為、力、声、思考、夢想の痕跡」を指している。次に「喜び」・「苦しみ」・「重さ」の内容をそれぞれ一般化して説明していく。最後の「重さ」が最も難しい。

解答ポイント

①「それら」の指示内容。②「喜び」、すなわち自分が歴史の中に存在することの説明。③「苦しみ」、すなわち歴史に自分の生を決定されることの説明。④「重さ」、すなわち歴史を支えていることの説明と、それにともなつて生じてくる責任の重さにも言及する。

解答例

歴史は無数の他者の行為、力、声、思考、夢想の痕跡であり、それらに生を決定されるのは苦痛だが、今を生きる自分がそれらによって支えられていることを感じるのは喜びであり、自らの痕跡をも含めて次代へとつなげていく重大な責任を負っているということ。(一一九字)

(六) **【漢字】**

解答

a	散逸(散佚)
b	超越
c	機会
d	信仰
e	矛盾